発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町2
電話 3033番 7140番
編集兼発行人　平島敏治

もはや総資本との対決
統一と団結を守れ
炭労古賀事務局長との対談

九月一〇日東京電話情報によると、同日第七回団交を開き、会社提案の全項目にわたり反論を行い、ひきつづき四・六協定以降の会社側の態度について、(1)四・六協定以降の経営努力がみられない。(2)今回更に提案したことについては、あまりにも図々しい。(3)自からの努力をしない点を無視して、われわれに対して首切りや、労働条件の引下げなど一方的に提案することについては、われわれとしてはこれを絶対受入れ出来ない。以上の三点から鋭どい追及を行い更に今後交渉を進めても進展することは考えられない。組合としては、経営者の態度があらたまればいつでも交渉に応ずる用意があることを申入れ団交を打切った。

階級連帯の闘い

交渉を打切った一〇日、炭労の古賀事務局長が九州炭労の地方委員会に出席し、三池に来山中であったので、今後の闘い方についていろいろ方針を平島組織部長より聞いて貰った。

問　いよいよ中央交渉も決裂したようだが、これからの闘いの方針はどのように組むのか。

答　企業整備に反対するとこうことだが、三井鉱山から三鉱連傘下各組合にかけられている企業整備は、ただ単に三井鉱山だけの要求ではなく、三井及び柞島或いは三菱と、石炭経営者全体の要求を反映し、大きくは日本の独占総資本の攻撃として企業整備をそれらの全組合員が見詰る必要がある。

従つて直接攻撃をかけられている三鉱連傘下の組合員は勿論、ひとり一人が最後まで強力に闘うという意志が必要であるが、直接攻撃をかけられていない各炭労傘下の組合員も、この攻撃を自分のものとして理解し、同じ行動と闘いの意欲とをもつて今次の企業整備に対決するという事が、炭労の基本的な闘争の構えである。

ネバリ強い闘い

問　昨炭が多い、炭界が不況だという今日、敵に与える徹底した打撃はどんな戦術を使つて闘うのか。

答　矢張り急激に実力行使を行つてストライキを急激にやつて意識を高めて行くということは、戦術的にわれわれ内部の戦力というものの限界を早めることであるから、じつくり落ちついて半年でも又は一年でも頑張るんだという長期且柔軟な形の中で闘争を組む必要がある。

先づ第一に具体的な行動としては、大衆行動や生産点における職場闘争が中心になつて展開されるということが、炭労としての企業整備に対する基本的な構えである。

次にどういう風にその闘いを組むのかというと三井や柞島、二瀬の企業整備を中心として炭労全体の統一闘争まで発展させる訳だが、全資本家階級のわれわれ労働者階級に対する対決である以上、単に炭労だけの闘争として発展させることは、階級対決の闘争としては必ずしも正しい闘いの組み方ではあるまい。総評としてはこの炭労の闘争を三五〇万総評全体の闘争としてこれを支えるため、具体的には九州、北海道、常磐という炭労として企業整備反対闘争の中心的な地域に拠点を設け、日教組国鉄、全鉱、合成化学、全逓、全日自労というような単産が、共闘を組んでその拠点における戦線の拡大をはかり、総資本に対決する構えを作らねばならない。

そのために、九月中旬以降は総評常幹を張りつけオルグとして派遣し、また各単産は中央幹部を夫々傘下組合に派遣して、炭労との共闘の拡大と、要求を掘り起して闘争を高めて行くというのが、炭労を包む共闘態勢の実情である。

三番目には、今度の企業整備の結果如何は、炭労組織の重大な運命を決するだけではなく、日本の労働運動が沈滞を続けるかまたは更に発展して闘争を続けて行くかの岐路に立たされている闘いであることを知らねばならない。

勿論、炭労中闘委員会は、大衆の意志を今次闘争の中に活かし徹底的に炭鉱資本及び総資本に対決するという決意でなければならない。

三池全組合及び家族の皆さん、いろいろ激しい敵側のPRやら切崩し工作があるかも知れぬが統一と団結とを守つて、三鉱労組を中心として全労働者統一の口火となるよう、最後まで頑張つて頂くようお願いする。

解雇業務の拒否
闘争強化に関する指令
する業務の拒否について

「赤字」だから「六人に一人のクビだ」、「不況」だから「最高一万円もの値下げだ」とうそぶくどう慢な会社側の態度はいよいよ露骨なものとなつてきた。

中央団交も決裂寸前にあり、会社側の一方的な強行を前にして、炭労中闘指令第六五号、一〇二号、一〇三号に従い闘争強化のため左記の通り指令する。

記

一、会社の解雇に関連

イ、解雇指名された者、若しくは希望退職者の退職手続に関する業務（例　退職金・賃金・旅費等の計算事務など）並びに「業務命令」は一切これを拒否せよ。

ロ、退職勧告・解雇通知の伝達その他解雇に関する業務並びに「業務命令」は一切これを拒否せよ。

ハ、前イ・ロ項とも、それらの事実を組合に速やかに連絡せよ。この場合、命令した者の氏名、場所、日時、命令内容などを明らかに報告せよ。

二、退職勧告の拒否について

イ、会社の職制を通じ口頭を以て退職勧告がなされたときは、これを拒否し、勧告を受けた日時場所、内容並びに口頭者氏名を可及的速やかに組合に届け出よ。

ロ、第三者を通じ口頭を以て退職勧告がなされたときは、これを拒否し、誰に依頼されたかを確かめよ。

その他の処置は前項と同じ。

三、指名解雇通告について

イ、指名解雇が内容証明・書留等によつて郵送された場合は、これを受領し、開封することなく直ちに組合へ届け出よ。

ロ、組合としてこれらの指名通告は一括・大衆行動により返上する。

四、会社貯金の労働金庫への預け替えについて

総評大会決定による炭労闘争支援のための労働金庫強化の具体策として、会社貯金保有者は第一次分として三千円を労働金庫に預け替えを行え。

五、その他

具体的細部事項については支部闘争委員長の指示に従え。

以上

„統一と団結"こそクビを守る　（笹林で）

五万が闘う戦列へ
大地評 荒地評 企業整備反対総決起大会

四・五八〇名の大量首切りを主軸とする苛酷極まる三井鉱山の第二次企業整備案にたいし、遂に炭都五〇・〇〇〇の組織労働者の怒りは爆発した。「三池を守ろう」の声は大牟田・荒尾の全市を沸かし、その声が遂に九月六日の「企業合理化絶対反対総決起大会」となつて戦後最大の大集団を笹林に駆りたてた。

この日、台風圏の接近を感じさせる、どんより曇つたむし暑さのなかに、ニュースカー「はたかぜ」を先頭に三鉱労組本部が定刻三十分前、堂々と笹林の広場に進入すれば、時を移さず三鉱六支部の全労働者、主婦を主翼に三池、三井東田、合成、電化、自労、国鉄、西鉄、全逓、全電通、県職、中小連その他民主団体など赤旗を先頭に次々に進入、さしも広い笹林公園も全く立錐の余地ないまで鉢巻白シャツの人の集団で埋つた。

定刻大地評会長の開会宣言について、三鉱、三井、三池、三鉱主婦会より議長団を選出、議長団を代表して久保田副組合長の挨拶、終つて三鉱灰原書記長、東田、染料、合成、電化の四単産を代表して三井労組永田書記長、県総評、国鉄、九炭労代表者の烈々火を吐く挨拶があつて会場は白熱緊張、ついでメッセージの祝電披露、スローガン採択、満場破れんばかりの拍手のうちに「大会決議文」を採択し労働歌斉唱、合理化反対総決起大会万才を唱して大会を終る。

次いで大地評・荒地評五〇・〇〇〇組織労働者の揺ぎない団結と、友誼を誇示する市中大行進は小雨を侵す重苦しい曇天の下を、二隊に分れて進発、無蹟五〇・〇〇〇の労働者の列は三十分の後には大牟田市内メイン・ストリートを全く埋めつくして「炭都労働者の揺ぎない団結」を遺憾なく誇示して午後一時感動溢るる大会の幕を閉じた。

大会決議文要約次の通り。

決議文

我々は本大会に於て次の行為を企てている炭鉱経営者に対し憤激と憎悪をもつてその不当を糾弾するとともに、その野望を粉砕するために大牟田・荒尾地評傘下の全組合員が鉄の団結で共闘を行うことを誓い、次の通り決議する。

三井鉱山は三池で二千二百十名の首切りを行うことを発表した。この人々は今日の三井鉱山の基盤を築きよるために日夜努力を続けてきたのであるが、あくなき利潤の追求に狂奔する資本家はそうした功績などは微塵もかえりみず、いわゆる企業の体質改善のために今までの協力者を血祭にするのである。赤字の解消のために労働条件の切り下げを行い一切の責任を労働者に転嫁するのはもつとも卑劣なことである。

彼等は石油との競争のために炭価の切下げをしなければならないといつているが、不況の真因はアメリカ軍需産業が世界の平和勢力の台頭によつて混乱を生じたことであり、そのおこぼれを仰いでいた日本の独占資本にも大きな影響となつたためである。石油は安くはいつているから石炭のコスト下げだけでは問題は解決しない。

（中　略）

首切りの風は三鉱だけでなく大牟田、荒尾の街を暗くし、切られたものも残つたものも、また我々の街も共に地獄となる。我々は家族を干乾しにしてはならない、我々は職場や地域で奴隷になつてはならない。憲法で保障された文化生活や失業のない生活は、我々の不断の闘いによつてのみ得られる資本の妥協のない攻撃から三鉱の組合員を守ることがやがては我が身に加えられる迫害を阻むことである。今日は人の身明日は我が身の合言葉をかみしめて、敵よりも一致だけ長く闘うことで企業合理化の攻撃をはね返そう。

大牟田、荒尾地区四万の労働者が腕をガツチリ組んで、首切り反対闘争を勝抜くまで共に闘う決意を誓い合おう。

一九五九年九月六日
大牟田地区、荒尾地区
企業合理化絶対反対総決起大会

雨ふつて地かたまる

毛利元就が、矢をつかねて「団結」を訓えたという古事をまつまでもなく、一人ひとりの労働者では絶対に望めない「抵抗」と「前進」をみんなの団結の力で実現して来た戦後十余年の労働運動の歴史が団結の絶対を証明している。

しかるに、戦後最大の資本攻勢を受けつつあるいま、しかも、中央団交決裂直後の九月一一日に、われわれは「製作所分離問題」をめぐる「組織問題」をひき起したいうまでもなく、この問題についても例によつて「中傷的」なマス・コミが、新聞・雑誌を通じて流されるだろう。

だがわれわれは確信を以てマス・コミを粉砕しなければならない なぜなら、本問題については執行部、決議機関全員徹底の努力によつて「**雨ふつて地かたまる**」のたとえどおりの解決をみたからである。

問題の発端は何か

製作所支部は昭和二一年一月に単位労組として結成され、同年一二月に至り三鉱労組にあらためて加入をしたという歴史が示すように、ほんらいは別組織であつた。

すなわち、炭鉱の附属機械工場に終始するものと断定できないものが事実として存在するし、このことはいわゆる「**組織の産業別整理**」の問題とも関連している。

つまり、その「発端」を一言にしていえば「炭鉱と機械工場は別組織の方がいいのではないか？」ということである。

前進
団結と分裂
——製作所分離問題——

では統一組織は誤まりか

われわれは、「労働組合の絶対的任務はクビを守ることだ」という決意を固め「英雄なき一一三日のたたかい」で戦後運動史の一頁を飾つたばかりでなく「完全雇用協定」をはじめて本ものにしたし、「入替採用・保安優先」を確立し「職場闘争」の実践でかけ声だけの「職場の民主化」をはじめて具体的な事実にすることを得た。

そして、これらの事実は、製作所支部を含めた全組織の統一成果であつたし、六支部全体の既得権である。

つまり、別々の組織では望めなかつた「条件」や「組織力」を「統一」していたからこそかちとつている、という事実を忘れてはならないのである。したがつて「組織の独立」後においても両組織間の共闘が組めるということが主要な条件であるはずだ。

主要な問題点

(1)会社は「合理化」の一かんとして「分離」をはじめて本ものにしたし、その故にわれわれは絶対反対なのだ

(2)この「**クビ切り・賃下げ合理化**」を六支部全体の力で全日本の労働者との共闘で叩き返すことが、なによりも先決である

(3)闘争終了後、「組織の独立」についての大衆討議を行い、みんなで真剣に検討する。

(4)労働者としての「組織の独立」と、それにつけ込む会社の巧妙な「分離宣伝」とを絶対に一緒くたにしてはならない。

(5)団結は、単なる理論ではなく、一人ひとりの同志愛の「結晶」であることを反省する必要がある。お互いの苦悩をあたたかく一緒に話し合おう。